

本稿の課題は、題目に示されてあるように大きく二点ある。第一に、現代アメリカの哲学者リチャード・ローティの政治・社会思想の緻密かつ統合的な解釈を提示すること、第二に、その思想の批判的継承をつうじて規範的社会理論の現代的な展望を試みることである。本稿は序論を含む5章より成る。

まず第1章では、『哲学と自然の鏡』における「哲学」批判で一躍世の注目を集めたローティの関心が、政治・社会思想へと転回していく経緯を明らかにする。第2章では、その政治・社会思想の概略を、ローティの「人権」論を手がかりに把握することを試みる。そのうえで第3章では、複雑とも錯綜したともいわれるその思想の論理構造へとさらに肉薄し、主要概念の関係の整理と統合的な解釈をつうじてその実相を解明する。それによって闡明されるのは、わけでも彼の「アイロニー」という概念とローティの掲げる「正義」すなわち「残酷さの回避」との内在的な結びつきである。

以上をもって第一の課題であるローティの論理構造が究明されたとすれば、残りの章において目指されるのはその「批判的継承」である。まず第4章では、「残酷さの回避」をめぐる吟味をつうじて、いくつかの論点を別決するとともに、「屈辱（精神的苦痛）の回避」がきわめて困難であることを闡明する。しかしその困難を深刻に受けとめたうえで、なおも「屈辱（精神的苦痛）の回避」は「政治」の目的とされねばならないとする。また第5章では、「残酷さの回避」の達成のために「他者の受苦への共感」とともにローティが提起する「身近な他者への共感」という「方法」について吟味する。それによって明らかになったのは第一に、かかる「方法」の背景には、普遍主義的道德が他者への道徳的配慮の非対称性として現出する「距離」の問題を捨象することへの批判が伏在していること。また第二に、その批判を「社会的連帯論」の文脈に置きなおしたとき、明らかになるのはその批判が現在主流となっている「非人称の連帯」の難点を的確に衝いたものであるとともに、そのオルタナティブとしての「人称的な連帯」と親和性をもっていることである。だが「人称的な連帯」の実現には、幾重にも折りたたまれた困難が立ちふさがっている。その達成のためには、「身近な他者への共感」よりはむしろ他者の被っている残酷さ（の強度）それじたいへ向かう我々の共感能力に注目する方が有用である。